



## 「われわれは次の世代のために 何ができるのか」

### バック トゥ ザ フューチャー

わが旅路 —— アメリカの教育者として

ハワイ大学コミュニティ・カレッジ名誉総長

ジョイス S. ツノダ (津野田 幸子 ジョイス)

バック・トゥ・ザ・フューチャー：「人生の節目、そのひとこまひとこまを振り返ってみて、今の自分の生き方を見直し、「生きる」ことの大切さを実感し、自分なりの未来を切り拓いていく。」そうしたロータリアンの真摯な姿勢を、次の世代の人々に伝え、見習ってもらいたいと思います。

56年前に、こちら佐世保に引き揚げてきた時から始まった私の人生。太平洋を越えて、学びの架け橋となることに自己を捧げて来て、今新たな局面を迎えようとしている、私のバック・トゥ・ザ・フューチャーを聞いていただきます。

お仲間のロータリアンのみなさまも、今、自分の生き方を見直し、自分なりの未来を切り拓きながら、自己投影の精神を取り入れ、次の世代の人々に語ってくださる際の参考となれば幸いです。そして、若い人々が、学ぶ楽しさと尊さに目を開くよう、手を貸していただだけませんか。「われわれは次の世代のために何ができるのか」に対する答えがここにあるのではないのでしょうか。

### はじめに

ハワイからアローハ!! 本日、国際ロータリー第2740地区 地区大会に、こうして参加させていただき、たいへん嬉しく、また光栄に思っております。

第2740地区会員のみなさま、そしてガバナーの安部直樹様に、感謝申し上げます。安部様は、九州文化学園の理事長でもいらっしゃいますが、ハワイ大学との交流を通じ、親交を深めて参りました。そして、今年度大会実行委員長の、池田豊様にもお骨折りをいただき、あつくお礼申し上げます。

本日、私は、アメリカ人教育者のひとりとして、意見を述べさせていただきたい、と思います。また、ひとりのロータリアンとして、ハワイで最も古い歴史を持ち、規模の大きい支部である、ホノルル・ロータリー・クラブからのごあいさつを申し上げます。クラブの全会員と、現在会長を務める、メル・カネシゲより、あたたかいアロハのまごころを、こちらにご出席のみなさまへ、お届けいたします。

私ども、ホノルル・ロータリークラブのメンバーは、45人の名誉会員を含めると、450名近くが、

毎週火曜日に、ワイキキのピンクレディと呼ばれる、ロイヤル・ハワイアン・ホテルで、昼食会を開いております。みなさま、ハワイにいらっしゃったら、ぜひ、私たちのクラブの昼食会にご出席ください。

### バック トゥ ザ フューチャー 説明

本日のお話の副題(サブ・タイトル)を、バック・トゥ・ザ・フューチャーとしたわけを、ご説明したいと思います。

日本語でぴったりの表現があるか、さだかではありませんが、その意味は、「過去を偲んで未来に向かう」と申し上げればよいでしょうか。

2003年、平成15年の今年、こちら長崎・佐世保での、ロータリー会議でお話をさせていただくことは、実は私にとって、たいへん意味深いことなのです。ご招待をいただいたとき、私は、このお声がかかるのを、いつも待ち続けてきたように感じました。それは、満州の生活の後、1947年に、私が新しい人生を始めた出発点、原点にかえっていらっしゃいというお誘いでした。現在こうしている私の人生は、1947年の佐世保から始まったのです。それから56年たった今、私は再び人生の分岐点に立ち、新たな人生を始めようとしているところです。まさに、バック・トゥ・ザ・フューチャー、ここからお話を始めましょう。

### 帰り船：1947年

まぶたを閉じると、いまだに見えてくるのは、船のデッキから見た、初めて見る日本の風景です。

母と三人の妹たち、そして祖父からなる私の家族は、おおぜいの引き揚げ者とともに、満州からたどり着きました。1947年の3月、貨物船の下の冷たい床に寝息をたてている家族から離れ、私はひとりデッキに駆け上がりました。薄暗い夜明けの中、私は日本の景色をいち早く見ようと、目を凝らしておりました。3歳になる前に満州に渡り、戦争の日々、そして戦後もしばらく大連に暮らしておりましたので、日本は私にとって遠い地、みんなが望郷の気持ちを募らせていた土地でした。そして、もしかすると、1944年に大連に私たちを残して招集されていったまま音信不通となっていた父が、私たちを待っているかもしれないところであったのです。大連で、母は、トランプ占いのひとから「幸生(父の名前)は日本で、あなたを待っている。」と言われたのです。

佐世保港に入港し始めた船のデッキで見つめる私の目に最初に映ったものは、佐世保の丘の風景、段々畑でした。船は、ゆっくり、ゆっくり港に入っていました。期待とともに、私の心に不安も広がりました。大連港で船に乗ったときのように、また、頭からDDTパウダーをかぶせられるのだろうか。

そして、カーキ色の軍服、肩にライフルというすがたのアメリカ兵が見えました。私はショックで危うくお漏らしをしそうになりました。といたしますのは、満州でも船の上でも、引き揚げ者の間では、あるうわさが、まことしやかに流れていたからです。そのうわさとは、アメリカやイギリスの兵隊が、日本の子ども、とりわけ小さい女の子を、チューインガムやチョコレートでさそい、さらっていくというものでした。アメリカのルーズベルト大統領、イギリスのチャーチル首相などの、重たいまぶたと、垂れ下がったあごをした、白人

の姿を誇張して描いた漫画のポスターを、引揚者のキャンプのあたりで、よく見かけたものでした。

私は、妹たちの手をしっかりと握って船をおり、日本の地に足を踏み入れたのでした。

栈橋を渡って長い道のりを歩き、引揚者用のバラックに着きました。そこで、引揚者は帰国の書類審査を済ませなければならなかったのです。私と妹たちは、そこで一週間をすごすうち、アメリカ兵に対して抱いた、最初の恐怖と不安を、次第に忘れていきました。

リグリーのチューインガムや、ハーシーのチョコレートの味といったら、ものすごく美味しかったのです。妹たちも私も、そのようなお菓子は、食べたことはありませんでした。ガム一枚、チョコレートの一枚が手に入ると、いつでも4つに細かくして、妹たちと分け合いました。私たちにとって、最初のアメリカの味でした。

### 佐世保からこんにちまで

あの佐世保の日々から今日まで過ぎ去った56年の月日を思い、私は感謝せずにいられません。とくに、母、ハワイ生まれの日系アメリカ人で、異国の地で夫と生き別れた後、残された家族をそろって日本に帰国させ、新しい人生をもたらしてくれた母。その時、母は、35歳という若さでした。夫と子どもたちへの責任を立派に果たしたと言えるでしょう。

この感謝と、たとえようのない懐かしさ、こうした思いを抱いて、私は、本日ここに立っております。過去を偲んで、未来にむかっております。私はアメリカ合衆国と日本、両国をふるさとと呼べることに誇りを持っています。アメリカは、私

を育ててくれた、第二のふるさとであり、アメリカの教育界に身を置く一人の人間として、それをととても幸いに思います。でも私は日本人として生まれ、10歳まで日本人として育ち、教育を受けてきたので、心のそこには大和撫子の精神が残っています。それを捨てる気はありません。

わたくしは、アメリカの公立学校教育の産物でありまして、初めて英語を話すことを教わった小学校から、ハワイの州立大学まで、公立学校の道を歩きました。そして、そのハワイ大学で、わたくしは自分自身の人生の地平線を開き、そして実現するとは夢にも思っていなかった道、すなわち学問と研究、そしてサービスの世界へと、思い切って進む力を与えられたのでした。そしてその後、37年の間、ハワイの地に、平等主義の高等教育システム、つまり、アメリカ独特のハワイ大学およびコミュニティ・カレッジを作り上げるという大きな仕事に、喜びを持って取り組んで、今日までまいりました。

「過去がずっと続いて現在があり、また現在が未来に続いていく事を実感する。」(益田晴代著；幸せへのアプローチ、p20)と、ある人は言いました。

そのとおりです。現在ここ佐世保にいる私は、あの過去がずっとつづいて、今に至っているのです。そして、未来へと。私たちが次の世代のためにできることは、何でしょうか。過去のスナップ写真の、ひとこまひとこまを、振り返って見つめ、私は、未来に向かい合い、その答えを求めたいと思います。

### 私の「過去」のスナップ写真

私の人生についてお話しすると、一日中かかってしまい、それは望んでいच्छららないと思います。仕事上と、個人的なものから、主なできごとだけを、お話ししたいと存じます。

1947年3月の佐世保については、さきほど触れました。もう少しお話ししたいことがございます。

### 天からの声：1945年8月

1945年の晩夏を、私はおぼろげに覚えています。大連のアパートの近所の人たちが、隣組の知らせにより、急きょ呼び出されて、一軒の家に集まり、ラジオを取りかこんでいました。古いラジオの聞きにくい音のうちに、私に聞こえたのは、何事か、私には理解できないことを話している高い声だけでしたが、周りでおおぜいの大人が涙を拭いていました。

終戦。終戦。7歳の子どもにとって、それがどんなに大きい意味を持つかは、わかりませんでした。ほどなく、もう学校に行かなくなった、といわれるまでは。当時、毎日楽しみに通っていた、ときわだ小学校に日本人の子どもたちは行かなくなったのです。学校は閉校。建物は中国人に明け渡されました。これが私には打撃でした。“終戦”が、突然私に意味あるものとなったのです。学校がなくなった！私は泣きました。

しかし母と祖父のおかげで、私は勉強を中断することはありませんでした。終戦から一年半の間、ようやく日本に帰れるようになるまで、私は自宅での学習を続けました。母は本や新聞・雑誌を集め、私に読み書きを勧めました。祖父は古本屋に

足を運び、あれこれの本を買ってきてくれました。教科書が手に入るたびに、私は1ページ1ページ、丁寧に書き写しました。妹たちにも本を読み聞かせました。読めない漢字があると、自分で適当に補って読んでいました。

算数を学んで、路上で生活用品を売る、祖父の手伝いもしました。やがて、一人で売のを許されるほど、達者になりました。ごぎを広げ、衣類や食器・時計など、引き揚げるときに持って行かないものは何でも並べて売りに出しました。売ったり、値引きしたり、お金を数えたり、算数は本当に実際役に立つものです。楽しかったですね。そして、母を助けて、少しは家計の足しになる働きができると、誇りに感じていました。

そこで学んだのは、ちゃんとした教室以外でも、教育はできる、ということです。応用学習は実際的で、役に立ち、自分に対する確信を発達させる方法となります。それには、親が関わるのが重要です。

ここで、私がもうひとつ人生勉強をしたエピソードを紹介したいと思います。いろいろなものを売る経験をつんで、自分に自信がついてくると、私は、誰にでも何でも売ることが出来るような気がしていました。ある日、母のオーバーコートを売るように言われました。それは、たった一枚、母が持っていたあたたかいコートで、母にとってそれがどんなに大事であったか、私にはよくわかっていました。それで、高価な値段をつけることにしました。その値段ではなかなか買い手がつきませんでした。やがて、一人の男の人がそれを見て、私の設定した値段で買おうと言いました。私は有頂天になりました。しかし、その人はコートはほしいけれど、手持ちのお金が足り

ないと言いました。もちろんコートを上げるつもりはなかったのですが、私はやっと訪れた、売れるチャンスを逃したくなくて、その人のアパートまでついて行きました。何よりも、まず、この人は日本人だったのです。それ以外に信用する理由はありませんでした。その人のアパートの玄関の前で、私は中に入るのをためらいました。というのは、知らない人の家に入ってはいけないと教えられていたからです。それで、その人が、奥さんにコートを見せてくるからちょっと貸して、すぐにお金を持ってくるから、と言った時、私はコートを渡し、そして待ちました。待って待って、待ちましたが、その人は出てきません。私は、ドアをノックして、というより、ドンドンとたたきました。コートを返して！と。中国人の女の人が、顔を出すと、あっちへ行け、とどなりつけました。私は、大声で泣き叫びましたが、どうしようもありません。おまわりさんが呼ばれて、私は連れて行かれました。私を探していた祖父が交番に来ていて、私は無事に家に帰りました。私はコートをなくして、ふるえていました。裁縫の仕事から帰ってきた母と、顔を合わすのが怖かったのです。私はしかられました。でも、それは、コートをなくしたことをではなく、私とその男の人の家についていったことと、日本人だからというだけで、信用してしまったこと、それをしかられたのでした。コートは重要ではありませんでした。私は無事でした。それが母と祖父には大事だったのを、私は知りました。

この一件から学んだ教訓は、人を人種で判断するなということです。私はこのことを、ずっと心に刻んでおります。

### せた小学校

#### 熊本：自然と自由の教育：1947年

1947年に日本に帰ってから、学校での学習を再び続けられるようになりました。熊本の、今は菊池郡大津町の一部となっている、大林という小さな村の小学校に行きました。教育を通じて社会性を身につけるといふ面では、いろいろなことを学びました。お友だちと仲良くやっていくこと、運動会での競争でのほりあい、学芸会のどきどき、「春風の姫」のようなやさしい類の役かわりに、「きびしい北風の神」のような魅力のない役が与えられる落胆を味わいもすれば、肉体労働の生き生きした楽しさも知りました。唐芋を植え、収穫期には芋ほり、肥料にするための牛や馬の糞を、いなか道で集めたりもしました。近くの小川や、ごうごうと音を立てる白川で、はだかんぼで泳ぐのも自由でした。阿蘇山のふもと、せた村では、記憶に残る良い体験をたくさん味わいました。私にとって日本のふるさとは、常にせた村でありつづけるでしょう。

私は今、孫の世代の子どもたちに、自然にかこまれて、あたたかい人間的な愛情に支えられ、自分で考え自らを律することのできる人間になることを期待して、学ぶ喜びを経験させてあげたい、そのために力を貸したい、と思っています。そしてここでのキーワードは、自制と自分に対する信頼です。

こんにち、よく疑問に思うのは、今の私たち大人は、子どもや孫たちに、多くを与えず、あまりに大事に育てすぎて、かえって傷つけているのではないかということです。そうすることで、子どもたち自身が、責任ある人間としてしっかりと育つ機会を奪っているのではないのでしょうか。

三無主義の世代を作り出している、という嘆きを、よく耳にします。三無主義、すなわち、無責任、無関心、無気力。そうだとしたら、私も祖母として、しかるべき役割をはたしていないことになります。孫を甘やかし、良かれ悪しかれ、欲しがるものをあたえがちです。

問題の解決には、三世代、百年かかる、といわれております。今こそ、私たち一人一人が、自分自身の世代と生き方を、子どもや孫の世代に反映するべきです。私たちが、21世紀の国を、日本そしてアメリカを、良い方向に変えていくとすれば、次の三世代を、まさに今このときから、変えていくことを始めなければなりません。

### 裸足の“ジャパン・ボブラ”

#### ：1948年－ハワイ

せた村小学校から、母の故郷、ハワイはオアフ島の北海岸にある、ハレイワ小学校へと、私は移ってきました。この変化はおおむね容易でしたが、文化的な壁にぶつかることは多々ありました。ハワイのおじおばの話している、奇妙な日本語、日本の学校にいる日本人の子どもたちとは、まったくちがった新しいクラスメートたち。英語の勉強、私や妹たちを好奇の目で見、「ジャパン・ボブラ」、日本から来たかぼちゃ、と呼ぶ、子どもたちからの、絶え間ないからかい。なんとしても、早く英語をマスターしなくては、と決心しました。私が優越を誇れたのは、算数の能力でした。日本の早期教育のおかげで、算数では、ハワイのクラスメートよりはるかにすすんでいました。それを自分に対する確信として、きびしいながらも思いやり深い先生のおかげで、英語の力もめきめき追いつ

きました。その先生とは、私の母やおじたちも同じハレイワ小学校で教わった、中国系のオールドミス、ホウエ先生でした。

良い教師と自己確信 a good teacher and self-confidence：学習の価値を高める決め手です。ホウエ先生は、1960年、私の結婚式に出てくださるはずでしたが、その一ヵ月前、車の事故で亡くなりました。それまでずっと、私の先生であり、友人でいてくださいました。先生が結婚のお祝いにと送って下さった、中華料理の本を、私は、今でも大切に持っています。

教師は、学生、生徒の人生に違いを作り出すことができます。きびしくも、面倒見の良い先生は、教えることに、自分の人生を捧げていました。こんにち、アメリカでも日本でも、ホウエ先生のような方には、めったにお会いできないでしょうね。

### ハワイ大学－1959年：権威に対する反乱

私が、ハワイ大学に新生としてその門をくぐったときには、高校の科学と数学の教師になるつもりで、教育学部にはいりました。1950年代の半ば、ハワイでは、私の世代の日系アメリカ人で、ハワイ大学に入れた幸運な女子学生は、教育か看護を専攻するのが正当、とされていました。ところが私は、教育学部が高校教員養成のために設定したカリキュラムに、満足していませんでした。それで、1年次と2年次にいる間に、化学の別の科目も履修しました。しかし2年次の後半、授業のスケジュールをたてるのに困難が生じました。それまで勉強していた有機化学を続けたかったところへ、教育の必修科目がかち合ってしまったのです。決められたスケジュールを変更することを認

めてくれなかった、教育学部のアドバイザーと言  
い争いになってしまい、私は教育学部を離れて、  
人文学部で化学を専攻することにしました。気持  
ちが高ぶっていたため、この決断をすることは簡  
単でしたが、心配するおじたちに、私の選択が正  
しいのだと納得させることは、容易ではありません  
でした。

「ジョイス、ハワイでは化学の仕事はないよ。」  
と、諭されました。しかし、私は頑固に自分の考  
えを変えず、そこへ幸いに、母が「自分の心と頭  
に従いなさい。」と私の味方をしてくれました。

もし、日本に住んでいたら、少なくとも、人生  
のその時点では、そのような生意気なことが許さ  
れないことは、わかっていたと思います。幸い、  
私はアメリカに住んでいて、そこでは、自分で選  
び、その結果に自分が向きあう自由がありました。

たしかに、私は化学で学士号を取ったとき、お  
じたちの言うのが正しかったのを知りました。そ  
の分野での仕事は、ハワイにはなかったのです。  
ところが、ふたたび、チャンス到来。それは、ち  
ょうどロシアが宇宙船スプートニクを打ち上げ  
た、タイミングのおかげです。科学者をたくさん  
育てなければ、というアメリカは国をあげての力  
の入れようで、私は、連邦政府から奨学金と助成  
金を支給されることになり、主人の理解を得て、  
大学院に進む機会を与えられたのでした。主人は  
こう言いました。「ジョイス、博士号を目指しな  
さい。ぼくは君がどういう人間か、知っている。  
今、このチャンスをつかまなかったら、君はきっ  
と後悔する。子どもを持つという考えも、今は魅  
力的だろう。でも、何年かたったら、子どものた  
めにチャンスを失った、と腹立たしく思うよう  
になるかもしれない。」こうして、家族の理解と協  
力のもと、学位と母親、両方を同時に追い求める

生活が始まりました。母と夫が、いかに私の力と  
なり、支えとなってくれたかは、感謝しきれない  
くらいです。

### 試験管から教科書へ：選択と責任

#### —1967年

1967年の5月、また、選択のときが訪れました。  
そのときには、生化学で博士号を取得していまし  
た。学業で、伝統的な研究者として進む道として  
は、私が学位をとった大学以外の大学院で、研究  
を続けることが要求されていました。ということ  
は、アメリカ本土のどこかの大学の研究所に入る  
ために、私、そして家族が、米本土に引っ越さな  
くはならないということでした。

しかし、どんなに私が野心を持っていても、本  
当に満ち足りた人生とは、愛するひとたちと、与  
えあい、わかちあうものだということが、いつも  
心の底にありました。それで、1967年、科学者と  
してのキャリアを続けるか、それとも、未知の分  
野、ハワイのコミュニティ・カレッジ教育という、  
まったく新しいタイプの高等教育の分野を始める  
かの、選択を迫られたとき、私は後者を選びまし  
た。それまで、教壇に立ったことがありませんで  
したが、ハワイ大学の伝統的な組織の枠組みの中  
で、新しくスタートした2年制のカレッジの教員  
となりました。このとき、博士号を取得するまで  
投入してきた努力が、水の泡となってしまったか  
のように見受けられたかもしれません。けれども、  
コミュニティカレッジの仕事を引き受ければ、  
ハワイでの家族の暮らしが影響を受けないことが  
わかっていました。主人は、会計の仕事始めて  
いたからです。また、もうひとつ重要なことに、

二人の娘と一緒に暮らしていたおばあちゃん、  
私の母といっしょにいられるということでした。  
ごく常識的な判断でしたが、私は、この選択を一  
度たりとも後悔したことはありません。この道を選  
んだことで、私は、夢にも見なかった、豊かに  
充実した職歴をたどることになったのです。

ハワイ大学コミュニティ・カレッジの職歴を振  
り返りますと、満足と誇りを感じます。いかに教  
えるかを学び、良き教師になることに力を入れ、  
私の教室で出会った、多くの学生たちに、違いを  
もたらしめました。オープンドアのコミュニティ・  
カレッジ、と呼ばれる、典型的なアメリカの高等  
教育機関をハワイに作り上げることに、力を貸し  
てきました。この七つのカレッジは、ハワイ大学  
機構の10箇所のキャンパスの部分となし、そこで  
学ぶ学生の数は、全体で4万5千人のうち、60%に  
のぼります。

### ミズーリ州カンザス市、1991年4月： 原子爆弾からコミュニティ・カレッジへ

ハワイ州全体にわたるコミュニティ・カレッジ  
機構の総長をつとめた20年間、そしてそのような  
地位についた、アメリカで最初の日系アメリカ人  
女性として、私はたいへん有り難い経験をさせて  
いただきました。なかでも、いつも心に浮かぶの  
は、アメリカ大陸の中心にある、ミズーリ州、カ  
ンザス市でのひとこまで。時は1991年4月、ア  
メリカコミュニティ・カレッジ協会、年次総会の  
冒頭セッションでのことでした。

たいへん広い会議場のステージの上で、私はた  
くさんの、顔、顔、顔の海に向かって立っていま  
した。全米から1,200以上のコミュニティ・カレ

ッジの代表が4千人、外国からも数百人、その中  
には、私がアメリカでの状況を見ていただきたい  
とお招きした日本の短期大学の学長先生たち12人  
もいらっしゃいました。私は、賞を受け取るため  
に壇上に上がったのですが、それは私自身に授け  
られたものではなく、ハワイ出身の国会議員、ダ  
ニエル井上上院議員のものでした。永年、ハワイ  
先住民を含む、アメリカ先住民の擁護と援助に当  
たってきた井上議員の功績が、アメリカコミュニ  
ティ・カレッジ協会からたたえられたのです。残  
念なことに、ワシントンでのスケジュールが急に  
変更になって、議員はみずから賞を受け取るこ  
とができなくなり、私が代理で受け取るという、名  
誉なお役目を務めることになったのでした。

ステージの上に立つ私の胸に浮かんだ思いは、  
このようなものでした。

「ああ、なんとという偶然、あるいは運命だろう  
か。カンザス・シティは、合衆国もと大統領ハリ  
ー・トルーマンの故郷。そこに今、私はこうして  
立っている。その人の、恐ろしい決断で、広島と  
長崎に原子爆弾が落とされ、それによって第二次  
世界大戦が終わり、私の人生も大きく変えられた。  
おそろしい戦争は、双方の数え切れない命を奪い、  
その中には、プロ野球選手として名をはせた、私  
の父もいた。父は、家族を残して、日本陸軍に召  
集されていった。北東中国の異郷の地に、若き日  
系アメリカ人の妻と、6歳、4歳、2歳と、生まれ  
たばかりの、4人の小さい娘たちが残された。戦  
地に赴いたまま、家族のもとへ永久に帰っては来  
なかった。戦争がついに終わりをむかえた。私の  
親戚の何人かも、広島で亡くなった。でも、とに  
かく戦争は終わった。そして、それを可能にした  
のは、ハリー・トルーマンの決断であった。

戦争とは国政府の間で戦われる。“Wars are

fought between governments, not between individual people.” 戦争はふつうのひとびとの暮らしを引き裂いた。でも過去の戦争から、私たちは何かを学んだのではなかったか。

私の思いは、再びトルーマンと、かれがアメリカのコミュニティ・カレッジに果たした役割におよびました。1948年、私がホノルルの港に着き、アメリカ人としての、新しい人生を始めたのと同じ年、トルーマン大統領は、戦争のつめあとから、国を回復する手立てをさぐるために、ブルーリボン委員会を指名して、かれらに進言を求めました。このトルーマン委員会が進言した中に、アメリカ全国総ての州に、入りやすく、費用もあまりかからない、2年制のカレッジを設立することが含まれていました。そのカレッジの目的は、大学教育初期2年間の教養科目のカリキュラムのほかに、雇用の機会を増やし、地域社会経済を発展させるために、実践的な職業技術教育・訓練を供給することでした。トルーマン委員会は、こうした2年制のカレッジを、コミュニティのカレッジ、とすることをすすめ、コミュニティ・カレッジの呼称はこれに由来しております。

その後、特に1960年代にコミュニティ・カレッジ運動が本格的に始まりました。

私自身の話に戻りましょう。

10年前のカンザス・シティ・コンヴェンション・センターの壇上で、私は、こうした思索と情動に胸がいっぱいになっていました。井上議員の代理で賞を受け取ったときに、なんと言ったか、正確に覚えていません。でも、心の奥底から、このようなことを言ったように思います。「ありがとう、アメリカ。私たちに良い人生をありがとう。今ここに井上議員自身がいらしたら、きっとこうおっしゃるでしょう。アジア系アメリカ人としての境

遇を誇りに思います、と。」

私が、それ以上に誇りと感じたのは、このことばをアメリカ人の同僚たちの前で言えたこと、のみならず、会議にお客さまとして出席していた、日本の短大の学長先生たちの前で、言えたことでした。

### ブレンダの博士号：1998年 教育を通じ持続できたこと

時は、1998年5月

場所は、ハワイ、ホノルルのハワイ大学

スポーツ講堂

ハワイ大学卒業式

大きなスポーツアリーナは1998年度卒業式の会場に変わり、飾り付けられていました。私はまたステージにあがっていました。ハワイ大学の副学長として、博士帽とガウンをまわっていました。しかし、このときは、1980年代初めから立場上出席し続けている、いつもの卒業式とは違っていました。この日は、私の家族にとって特別なお祝いだったのです。次女のブレンダ（ゆかり）が、ハワイ大学から、疫病学で博士号を授与されようとしていました。そして私が自ら娘に、博士フード（学位を示す大学式服の垂れ布）を、授与しようとしていたのです。新しく誕生した博士に、博士フードを授けることは、学問の世界の伝統で、名誉の瞬間です。ふつうは学位論文の指導にあたった教授が、これを行うのですが、ブレンダの場合は、教授がその名誉の役目を私に譲ってくれたのでした。

緑と金色のフードを娘の肩に掛け、握手をし、ハワイの伝統である花のレイをかけ、キスをした

とき、私は誇らしさと、嬉しさと、深い感謝の念に涙があふれてきました。そして、その感謝は再び、アメリカという祖国と、アメリカ人としての私たちの人生に対する感謝でした。

チャンスの国。選択の自由がある国。ブレンダが学位を取得するのに、非常に努力したことはもちろんです。二人の活発なこども、当時6歳の男の子と3歳の女の子を育てながら、それを達成したのでした。同時に、彼女の夫、高校で歴史を教えるかわらフットボールのコーチもしている夫の支えともなってきました。その夫は、若きプエルトリコ系アメリカ人で、彼の家族の中で大学教育を受けたのは、彼が最初でした。

ブレンダは何から何までアメリカ女性です。ROTC予備役将校訓練部隊の奨学金を得て、ハーバード大学にすすみ、エール大学で修士号を取り、コネチカット州ニューヘブンで、エイズの研究に数年あたった後、ハワイに帰ってきて科学研究と家庭を始めました。

ブレンダは、姉のシャロンや私たち両親のようには、日本語を話しません。しかし、ふたりの子どもにはプエルトリコと日本のルーツをもつ、自分たちの背景と、それに誇りを持つことを常に教えています。幼い孫娘のゾーイがよく言うのは、「私の日本人のおばあちゃんは、おすしやおにぎり、プエルトリコ人のおばあちゃんはガンドーディ・ライスを、わたしに作ってくれるの。どちらも大好き！」

私の二人の娘は6年生まで公立学校で学び、その後は私立の女子高に進みました。ブレンダは、思い切って、アメリカでもっとも難しいといわれる高等教育の道に挑んでいきました。長女のシャロンは、全く違う道を選び、自分のルーツを求めて、日本に行って日本語を勉強し、日本の上智大

学で、両国の比較文化を専攻しました。今は、日本で整形外科医の夫を支え、三人の子どもたちの、日本人としての教育に努力しています。

二人の娘たちと私は、個人の選択にチャンスを与えるというアメリカ教育の産物である、日系アメリカ人女性です。私たちは、アメリカ市民であることに誇りを持っています。同時に日本人としての立場も大切にしています。二つの世界の良いところを、次の世代に残すことが、わたしたちの願いです。

### 結びにかえて

お話が長くなってきたので、まとめに急ぎましょう。

私の過去のスナップ写真をみなさまにご覧いただきました。これらは、私の人生を組み立てている、レンガの一部分です。その総てに一貫していたのが、教育という決定的な要素でした。そしてそれはふつう私たちがイメージする学校教育と学校の外で学び取る、いろいろな形をとる学習と、両方の意味があります。校外の学習とは、家で、周りの環境の中で、たくさんの失敗を繰り返し、時には大成功をおさめたり、日々の暮らしの中、試行錯誤して学んでいくというものです。

「学ぶ」ということは、果てしなきことで、ここまででよしという終点がありません。「学ぶ楽しさ」二人の娘に、何か、受け継がれるものを残せたとしたら、それは学ぶことが大好きということ、そう思いたいのです。学ぶということは、つねにほかの人によって支えられ、助けられている、これはたいへん重要なことです。家族、面倒見の良い先生、友人たち、また、時には見ず知らずの



人々までがそれを助けてくれます。

私がまず感謝しなくてはならないのは、母、やさしくて強かった母ちゃんであり、父方の祖父です。嫁と孫たちを命がけで守ってくれた、じいちゃん。まだ生きていうちに、もっとたびたび、感謝の気持ちを伝えていたら、と思います。

そのほかに、私の深い感謝をささげたいのは、からだ一つで引き揚げてきた、五人家族を快く迎えてくれた、熊本のおじ、おば、いとこたち、せた村の人々。そしてハワイに呼びもどしてくれた、母の兄たち、私のおじたちです。

そして、私のような、お金持ちでもない、くらしもない、日系移民女性に、ここまで自分なりの個性を伸ばす機会を与えてくれた、アメリカという自由国に、深い感謝の念を持っています。

私は、自分の過去を美化するつもりでもなければ、感傷に浸っているのでもありません。どんな人にとっても、自分の過去をかえりみ、未来に立ち向かうことは大切です。ここにお集まりのロータリアンの皆様も、これまで、コミュニティのリーダーとなる道を歩まれてきた、その途上の節目節目に撮られたスナップ写真のアルバムをお持ちでいらっしゃいましょう。それを後進の人々に、分かち合ってくださいる機会のために、良い事例となれば幸いです。

もう一度、私の友人、益田晴代さんのことばを紹介させていただきます。

「自分の素晴らしさとはなんだろう。過去を振り返り、今までの人生のひとこま、ひとこままで、自分の心はどうだったかを見つめたとき、自分の未来も見えてくる。よかったことを見つければ、そのまま未来にむかえばよいのだが、もし悪いことがあったとしたら、もう一度そのときの自分のあり方を見直すことが大切である。

そうやって自分のあり方を確認し、今日を生きていくことが、心を充実させていくことになる。その心を充実させることが、明日を拓いて前進する活力になっていくのである。」

この自己投影の精神をもつてのぞめば、次の世代に手を差し伸べ、手を貸すことができる、と私は確信しております。その行動を通じ、言葉だけでなく実質的な行動を通して、私たち一人ひとりが、次の世代が充実して生きるのを助け、素晴らしい日本と21世紀の世界を築いていくのに、どうしたら貢献できるか、自分なりの道を見つけていくことができる、と思うのです。みなさまは、どうお考えでしょうか。

私が、これからの次の人生について、どんな計画をもっているか、少しお話してもよろしいでしょうか。本日、こちら佐世保から、新たに始まる私の新しい人生についてです。

ハワイ大学での40年を、そろそろ退く時期が来た、と決断しました。来る新年元旦、私が66歳となるときです。

しかしながら、私は、教育の分野を去るわけではありません。教育者であり続けるけれども、違うかたち、違う環境、アメリカ、ハワイから太平洋をこえてアジア、特に日本という、拡張した環境のもとで、教育を考えたいのです。東と西、太平洋の島々の間、違った世代、異なる文化、そのようなものの間の、架け橋となってきた、高等教育分野での広い経験を生かしたいのです。

私は、化学の研究者となるべく教育を受けましたが、その代わりに、教育の分野に進みました。草の根の人々に、良質の高等教育の機会を提供したい、そうしたオープン・ドアのコミュニティ・カレッジを守るために、これからもその代弁者として活動していきたい、と思っております。今ま

での過去30年間、私は、ハワイ大学の管理者の立場でした。これからは、自分の出発点であった教室に帰って、教える仕事をしたい、それも日本でそうしたい、と考えています。

なぜ、日本で教える決心をしたかという、理由は単純です。私が、日本とアメリカの、教育の架け橋となるなら、日本の教育の現状をより深く知る必要があるからです。そのために一番良い方法は、教育の現場、日本の大学の教室や実習室にはいり、今の学生たちと直接触れ合って、彼らを知り、彼らから学ぶことです。教える事はおそわること。これには、強い確信をもっております。

私は、自分の日本語力も伸ばしたいと望んでいます。自分の生まれた国、日本のことをもっと勉強したいと思います。私の日本の学校教育は、せた小学校の4年生までで、終わっています。補い、追いつかねば成らない知識との開きは、莫大です。歴史、文化、文学、地理、社会・政治制度、思索、私の未来は、新しい学習の経験に満ちています。なんと楽しみなことでしょう。

「一生勉強、一生青春」、みなさまご存知の書

家、相田みつを先生のことばです。これを戒めとも、励ましとも、喜びとも受け止め、私も、次の世代に対する、自分なりの貢献の道を求めていこうと思っております。これが、本日の演題である、「我々が次の世代のためにできることは何か」この質問に対する、私なりの答えです。

日本、ハワイ、米本土で暮らす私の孫たち、甥や姪の子どもたち、彼らを含む次の世代の人々に、私は何か違いをつくり出さなくてはならない、それを実現するのが私の望みです。

こちらの写真に、その何人かが写っています。私の家族です。こうすけ、あやか、さき、(さいたまに住んでいる孫たち)、ハワイに暮らしている、ザッカー、ゾーイ、と、そのいとこたち、ダニエル、マイケル、クリストファー、サマンサ、トレパー、タウニー・ラエ、サブリーナ……、私の家族、文化と人種が照り映える虹です。彼らと、世界中の彼ら、こどもたちの未来をよき世界にすること、それが私の願いです。

ご静聴ありがとうございました。

### My Family and Me

